



学会諸行事の 記録を残すために



磯部 雅彦

土木学会 第102代会長

昨

年の土木学会100周年を記念してさまざまな事業が、8支部から始まって全国的に展開されました。これにご尽力いただいた諸氏には心から感謝申し上げます。今後、これで終わりとせず、そこで得られた経験を活かし、継続すべき活動は可能な限りなんらかの形で今後も続ける工夫をすべきと思います。

全国にわたる諸行事の多くに参加して改めて思ったことは、実に興味ある行事が行われており、もっとたくさんの人に見ていただきたく、また見たい人も多いであろうということ。100周年に限らず、土木学会の諸行事では講習会やシンポジウムをはじめとして、資料集を作成することが多いです。そのような資料は後に残るもので、行事の内容を振り返り、学ぶことができます。しかし、それだけではわからない部分があったり、またパネルディスカッションや市民との交流のように、その場の雰囲気のような、資料からはうかがい知れないことも多いと思います。行事には、準備から始めて多くの労力と費用を要することが多いだけに、その成果は最大限に活かすべきです。

土木学会では、デジタルアーカイブスと言って、過去のさまざまな図書資料をデジタル化して管理・運用しています。これは昔の論文などを読み返すのに非常に便利なものであり、土木学会の会員・非会員に応じたコンテンツを、全世界からインターネットを通じて見ることができます。

土木学会の諸行事についても、アーカイブスのようなものができる、会員やその他の市民に



とつても非常に有益なことになるのではないでしょうか。また、そのようなものを土木学会が所有することで、学会としての財産にもなり、存在価値が高まります。

ビデオカメラなど最近の記録装置は解像度が高く、素人が手軽に記録しても、相当な質の情報が残せるようになっていきます。講演会を開催する際に、最後列からビデオ装置を回し続けるだけで、その場での発表内容や雰囲気がかなりよくわかります。また、デジタル化されているので、テープのように物理的に場所を取ることあまりなく、学会図書館で一括して保管し管理することも容易です。そうすれば、当日は都合がつかないとか、地理的に遠いなどの理由により、参加できなかった人や、後世の人が見ることで

るようになります。なお、地理的な隔たりに関しては、現在ではインターネットを用いた同時中継も利用する例もあります。

このようなことを可能にするシステムづくりは、諸行事を準備し実行する努力に比べれば軽微であり、会員や行事担当者の賛同が得られれば実行可能でしょう。技術が発達し、手段が変化すれば、それに応じて利用形態を改善すべきことは自明です。土木学会が、利用者にとって便利なシステムを整え、より多くの利用者を得ることは重要な視点であり、それを通じて学会の社会的存在意義も高まるといえるものです。土木学会の会員諸氏が、熱心に活動し、学会に尽力いただいている成果を、より効果的なものにするシステムづくりにも、心がけるべきであると考えています。